人はなぜ嗜癖行動をするのか？

—Web 日記法を用いた主観的動機に関する調査から—

○高橋伸彰¹・成田健一²・嶋崎恒雄²

(¹ 関西学院大学大学院文学研究科・² 関西学院大学文学部)

キーワード：嗜癖, 主観的動機, 日記法

Self-monitored motives for the addictions: A diary study used the web survey.

Nobuaki TAKAHASHI¹, Ken'ichi NARITA² and Tsuneo SHIMAZAKI²

(¹ Graduate School of Humanities, Kwansei Gakuin Univ., ² School of Humanities, Kwansei Gakuin Univ.)

Key Words: addiction, self-monitored motives, diary study

目 的

人は様々なものに嗜癖する。この嗜癖の対象となるものはアルコールなどの物質のみではなく、ギャンブルなどの行為にも及ぶ。これらの各種嗜癖が疾病としてみなされる時、それぞれの嗜癖対象ごとに分類され検討されるが、全ての嗜癖に共通する部分もあろう。これら多種多様な嗜癖の異同点について、これまで神経科学的な観点や嗜癖することの機能的側面などから、多くの研究がなされてきた。本研究では、Web 日記法を用いた嗜癖の主観的動機に関する調査を行い、日常生活のどのような文脈から嗜癖行動が生ずるかという観点から、各種嗜癖の異同点について検討した結果を報告する。

方 法

調査対象者 2回に分けて、インターネット調査会社を通じて参加を依頼し、回答を求めた（調査時期：2014年1月～3月）。7日間の日記調査に参加することに同意した者を対象に事前調査を配信した（回収数：1955名）。事前調査で有効回答であった1648名に対し再度、本調査を依頼した。一定の基準により回答姿勢に問題がないと判断された726名のデータを解析対象とした。日記調査の回答日数は6日以上であった。

質問項目 本研究では嗜癖の種類として、1) YouTubeなどの動画サイトの閲覧、投稿（以下、動画サイト等）、2) ブログ、Twitterなどのマイクロブログ、FacebookなどのSNSの閲覧、書込み（以下、ブログ等）、3) 2ちゃんねるなどの掲示板の閲覧、書込み（掲示板）、4) オンラインゲーム、5) テレビ、6) 飲酒、7) コーヒー、8) 喫煙、9) 過食／拒食、10) ギャンブル、11) ゲーム、12) 運動・スポーツ、13) 買物・浪費を対象とした。以下の質問について、上記嗜癖対象ごとに多重回答を求めた。

各嗜癖の有無（事前調査）：アメリカ精神医学会による診断基準であるDSM-5における、嗜癖を構成する要素である「耐性」「離脱」「自己制御困難」「社会障害」「欲求」について、それぞれ「以前よりも量や回数が増えてきた」「やらないとソワソワしたりイライラしたりする」「なかなかやめられない」「やっつけていけない時でもやり続けてしまう」「やりたいという気持ちがとても強い」を設けた。

主観的動機（日記調査；1週間毎日）：Piasecki et al. (2007)を参考に、各嗜癖行動を行った場合のその主観的動機として「やらずにいられない」「習慣・癖」「人付き合い」「気分が悪いから」「気晴らしに」「暇つぶし・休憩など」を設けた。

結 果 と 考 察

解析対象となった726名の事前調査における各嗜癖対象ごとの嗜癖の有無に関する質問から、いずれかの項目を選択した者をその対象の嗜癖あり群とし、いずれも選択しなかった者を嗜癖なし群とした。各種嗜癖の嗜癖者数は、1) 動画サイト等 209名、2) ブログ等 164名、3) 掲示板 102名、4) オンラインゲーム 125名、5) テレビ 258名、6) 飲酒 172名、7) コーヒー 353名、8) 喫煙 132名、9) 過食／拒食 151名、10) ギ

ャンブル 79名、11) ゲーム 169名、12) 運動・スポーツ 243名、13) 買物・浪費 267名であった。

6日もしくは7日の内、各主観的動機が選択された割合を嗜癖対象ごとに求め、角変換を行った。以下の解析はこの角変換後の値を用いた。対象によって嗜癖行動の出現頻度が大きく異なるため、嗜癖対象ごとに嗜癖の有無×主観的動機の二元配置の分散分析を行った。その結果、全ての嗜癖対象において、嗜癖の有無の有意な主効果（ $p < .01$ ）が認められた。また、過食／拒食とギャンブル以外の全ての嗜癖対象において、主観的動機の有意な主効果が認められた（ $p < .01$ ）。このことは、過食／拒食およびギャンブルに対して嗜癖している者は、他の対象に嗜癖している者と比較して、幅広い主観的動機に基づいてその行動を行っていることを示しており、各種嗜癖行動ごとに、生じる日常生活上の文脈が異なることを示唆している。そして、全ての嗜癖対象において、嗜癖の有無と主観的動機の有意な交互作用（ $p < .01$ ）が認められた。嗜癖の有無にて各主観的動機が異なるか、角変換により求めた値を基にt検定を行ったところ（Bonferroni法）、動画サイト等、テレビ、コーヒー、ギャンブルにおける「人付き合い」に有意な差は認められなかった。また、「人付き合い」は他の嗜癖対象では有意差が認められたものの、一貫して差が小さい傾向が認められた（「人付き合い」の群間差の範囲：-0.23から10.58；それ以外の主観的動機：1.56から54.41）。このことは、主観的動機としての人付き合いは喫煙における嗜癖の有無を予測しないとするPiasecki et al. (2007)による結果と一致しており、喫煙のみならず嗜癖全般に一般化できる可能性を示唆している。すなわち、社会的機会により生じた嗜癖行動は嗜癖の有無と無関連であることは、各種嗜癖において共通したものであると考えられる。さて、テレビと買物・浪費における「暇つぶし・休憩」、買物・浪費における「習慣・癖」においても群間差は認められなかった。テレビは嗜癖の有無にかかわらず「暇つぶし・休憩」として視聴されており、買物・浪費では嗜癖の有無にかかわらず「暇つぶし・休憩」とされることは少なかった。そして、買物・浪費では嗜癖の有無にかかわらず「習慣・癖」によるとされることが多かった。これらの結果は、主観的動機の主効果の結果と同様に、嗜癖対象ごとに、生じる日常生活上の文脈が異なることを示唆している。

本研究では、各種嗜癖行動が生じる日常生活上の文脈が異なる可能性が示唆された。嗜癖の介入においては、嗜癖全般に適用可能な代替行動があるわけではなく、むしろ、各種嗜癖に適切な代替行動を獲得させる必要があると考えられる。

引用文献

Piasecki, T.M., Richardson, A.E., & Smith, S.M. (2007). Self-monitored motives for smoking among college students. *Psychology of addictive behaviors*, **21**, 328-337.